

# 主な調査結果

## 1. 回答企業のプロフィール

## 2. 重点テーマ:「デジタル化」の進展と成果

- ・ビジネスのデジタル化  
組織／システム／基盤

## ➤ 3. IT予算・投資マネジメントとの関係

- ・ITトレンド
- ・IT予算・投資マネジメント

## 4. 基幹システム・マスターデータとの関係

- ・企業を支える基幹系システム  
・マスターデータ

## 5. システム開発・IT基盤との関係

- ・システム開発
- ・IT基盤

## 6. グローバルを含む情報セキュリティとの関係

- ・グローバル戦略
- ・情報セキュリティ

## 7. IT人材との関係

- ・IT人材

# 【ITトレンド】

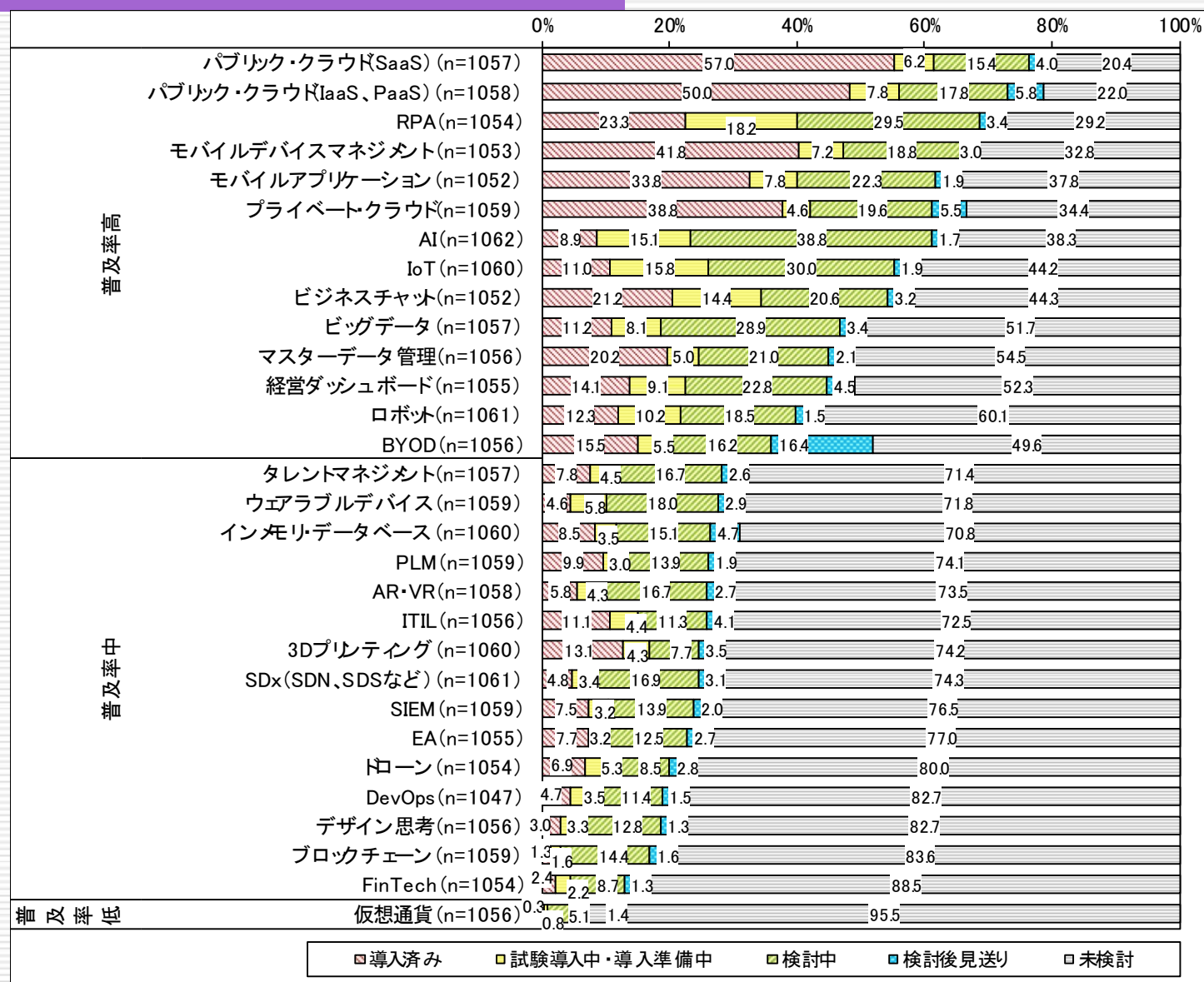
## 18年度調査のポイント

1. 導入が進んだテクノロジー等は「RPA」「パブリッククラウド(IaaS、PaaS)」「AI」。特にRPAの導入が大きく進んだ
2. 重視すべきテクノロジー等は昨年度と同じ傾向で「AI」「RPA」「IoT」「各種クラウド」「ビッグデータ」。RPAは昨年度5位から2位に
3. 重視すべきテクノロジー等が選ばれた理由は全体的に「生産性の向上(省力化・コスト削減)」の割合が高い。「IoT」と「AI」では「新規ビジネスの創出」としても注目

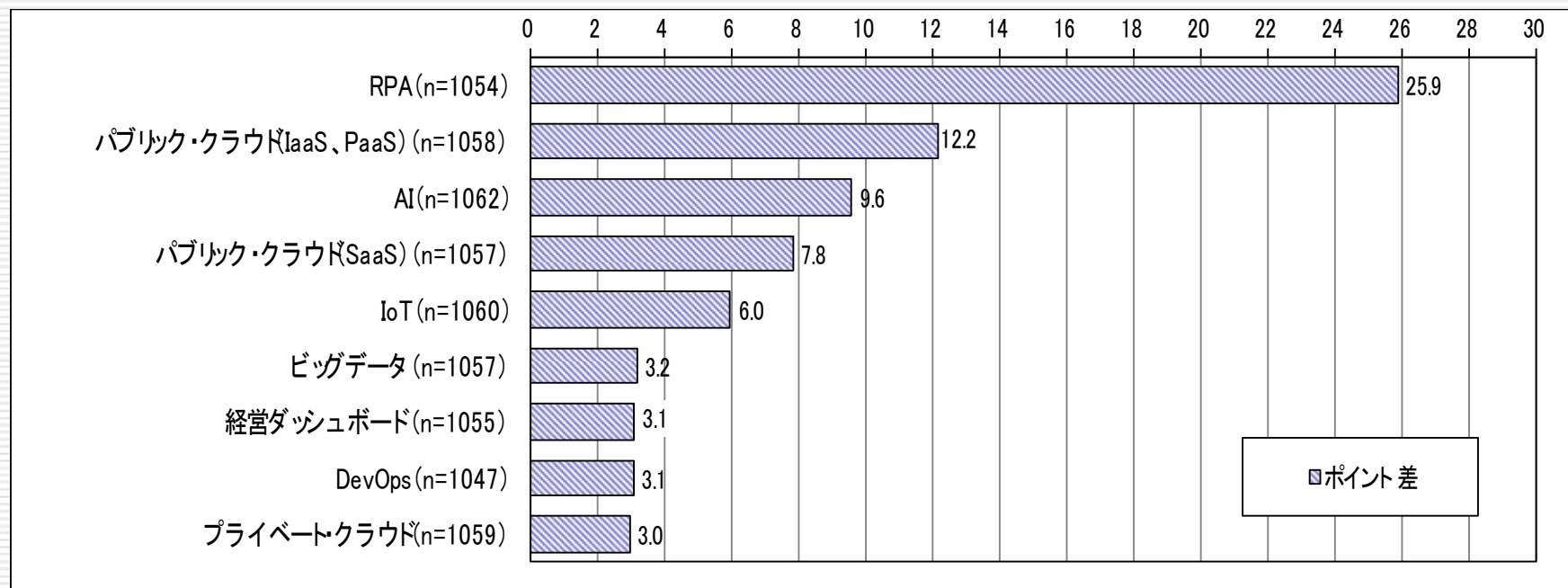
## 重点テーマ(デジタル変革力)との関係性・ポイント

1. 上位に選ばれたテクノロジー等はデジタル変革力にかかせない
2. 業務プロセスのデジタル化に注力している傾向が見える
3. RPAは多くの企業で取り組まれているが、来年度調査の動向を注視する必要あり

<普及率順 新規テクノロジーやアプリケーション等の導入状況>  
普及率高は昨年とほぼ同じ顔触れであるが、RPAが大きく伸び3位になった。  
。18年度から追加したビジネスチャット、ロボットが普及率高になった。

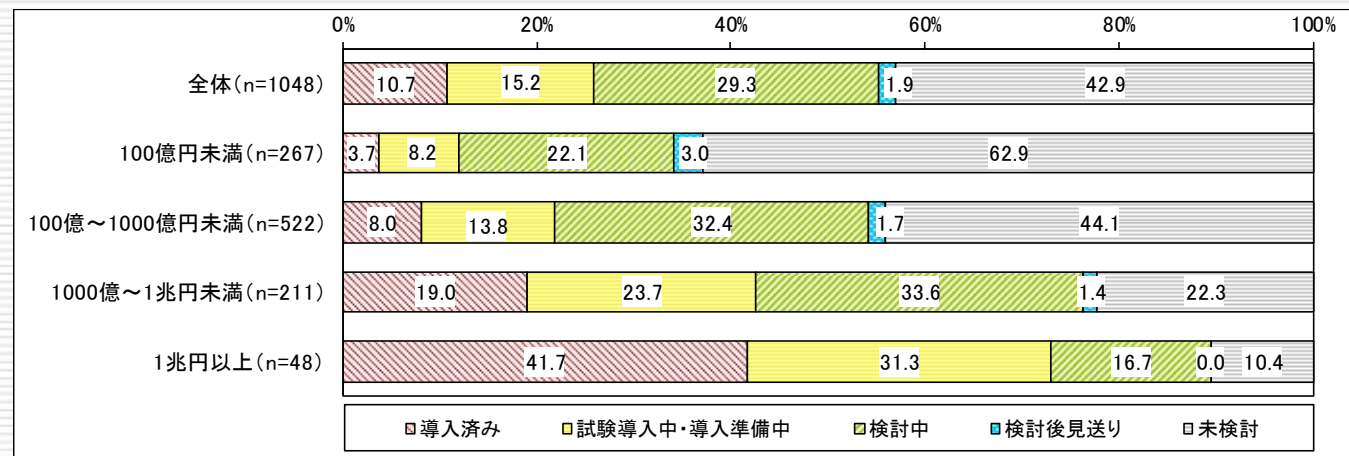


＜「導入済み」～「試験導入中・導入準備中」の伸び率：対17年度＞  
「RPA」「パブリッククラウド(IaaS、PaaS)」「AI」が、17年度調査から更に導入が進んだテクノロジーおよびアプリケーションといえる。特にRPAの導入が大きく進んだ。

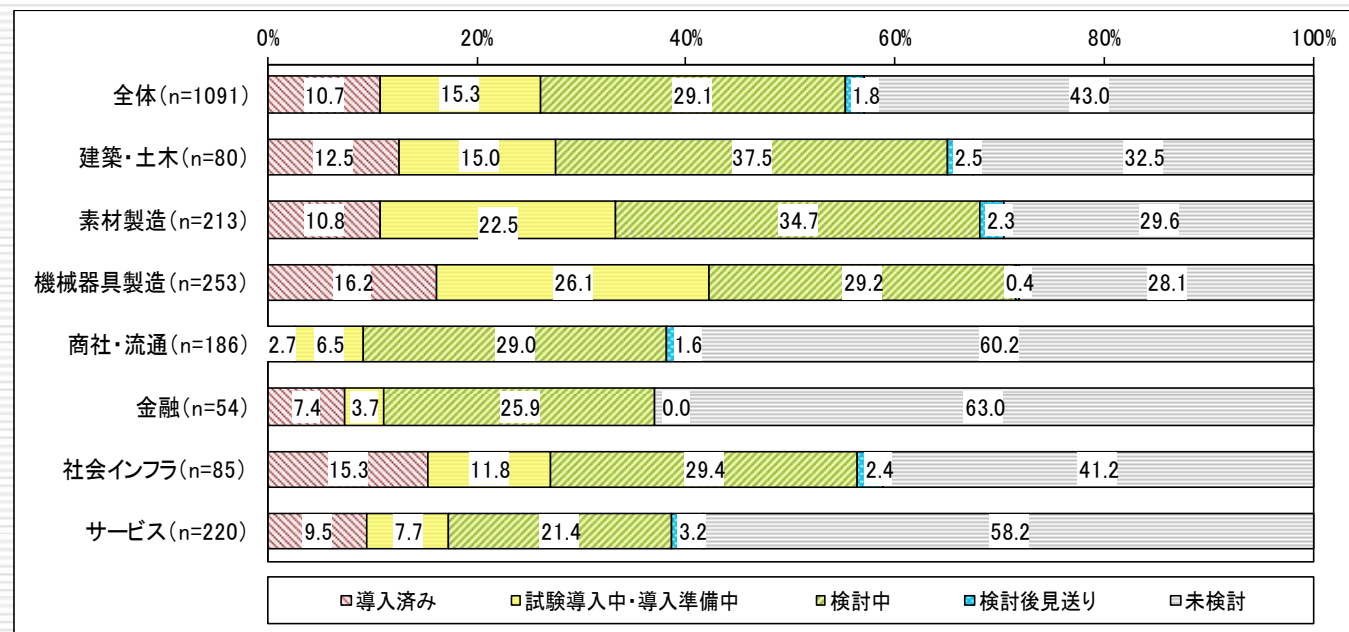


＜IoTの導入状況＞ 売上高が高いほどIoTの導入が進んでいる。1兆円以上の企業では約7割が導入、又は導入準備中。業種別では機械器具製造、社会インフラ、建築・土木の導入率が高い

### 売上高別 IoTの導入状況

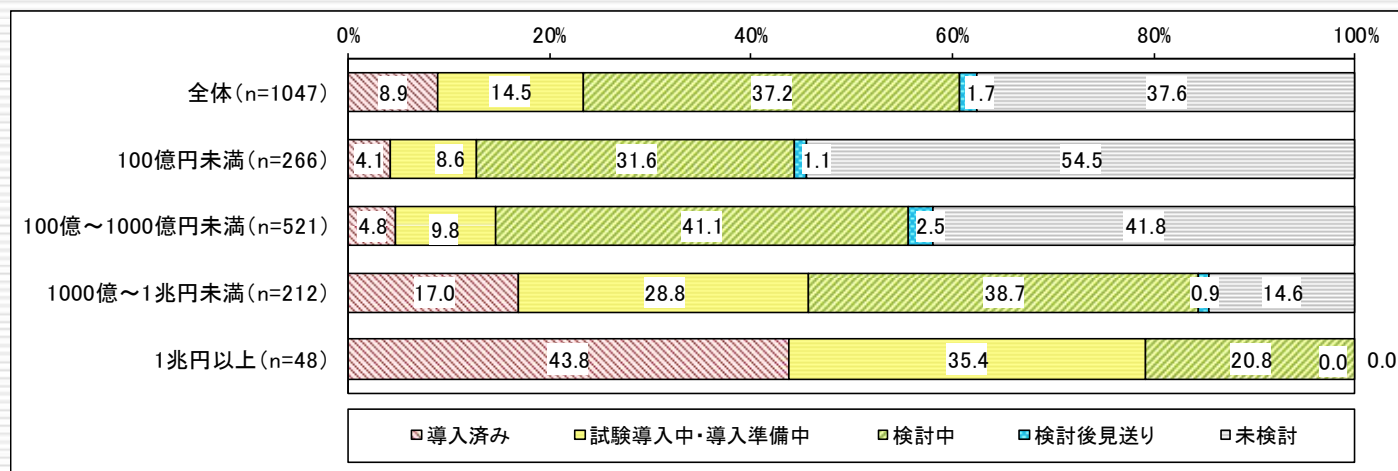


### 業種別 IoTの導入状況

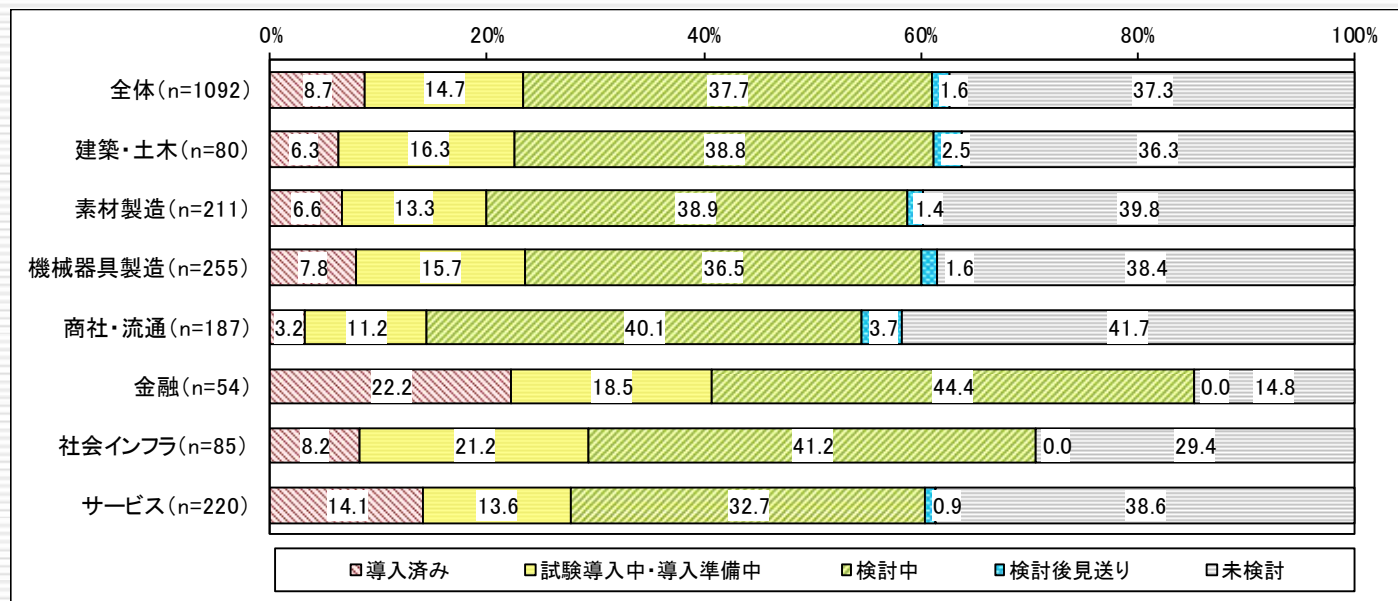


# <AIの導入状況> 売上高が高いほどAIの導入が進んでいる。1兆円以上の企業では約8割が導入又は導入準備中。業種別では金融、サービスの導入率が高い

## 売上高別 AIの導入状況

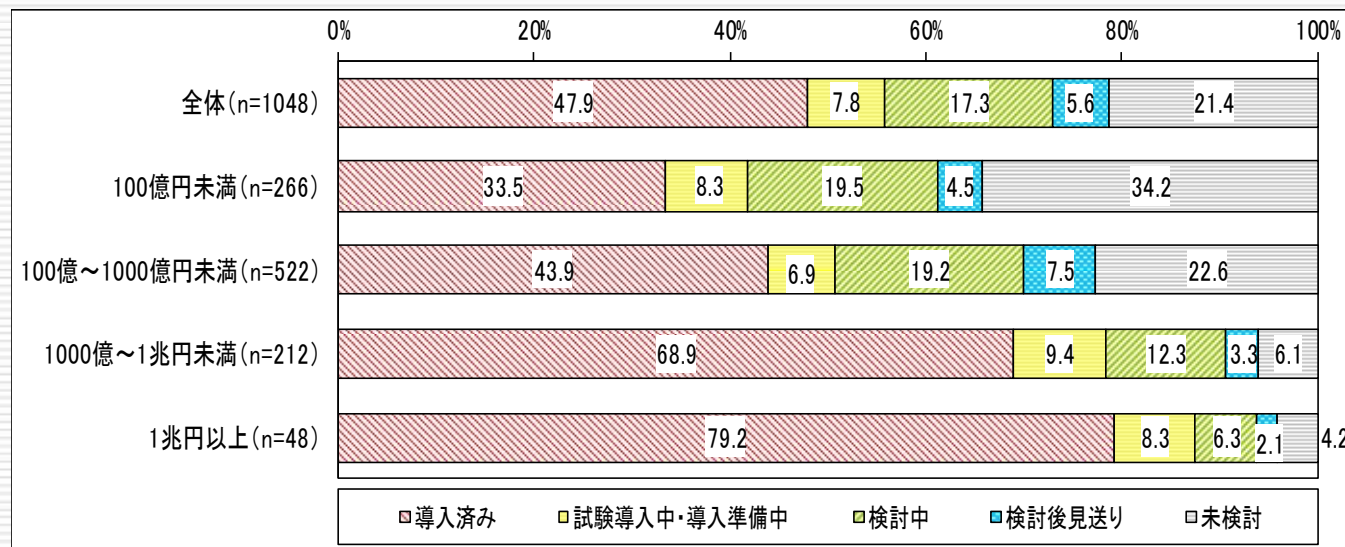


## 業種別 AIの導入状況

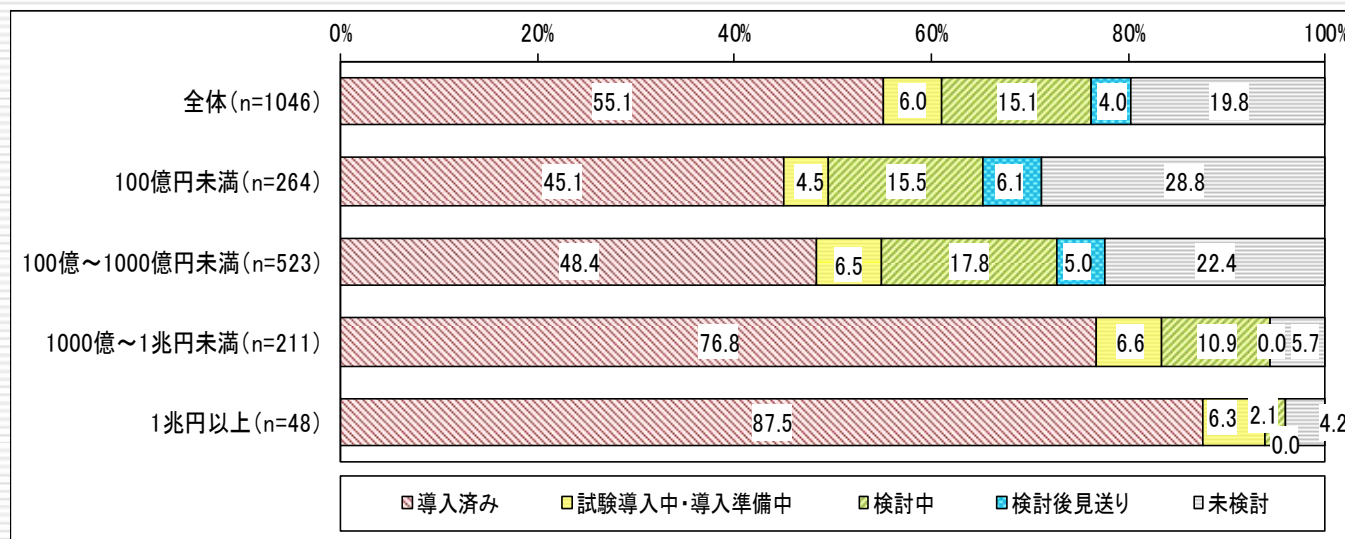


＜パブリッククラウドの導入状況＞ パブリッククラウドの導入は進んでおり、1000億円以上の企業でIaaS、PaaSは7～8割、SaaSは8割～9割に達する。1000億円未満の企業でもIaaS、PaaSで4割前後、SaaSで5割近くが導入

売上高別  
パブリッククラウド  
(IaaS、PaaS)の  
導入状況

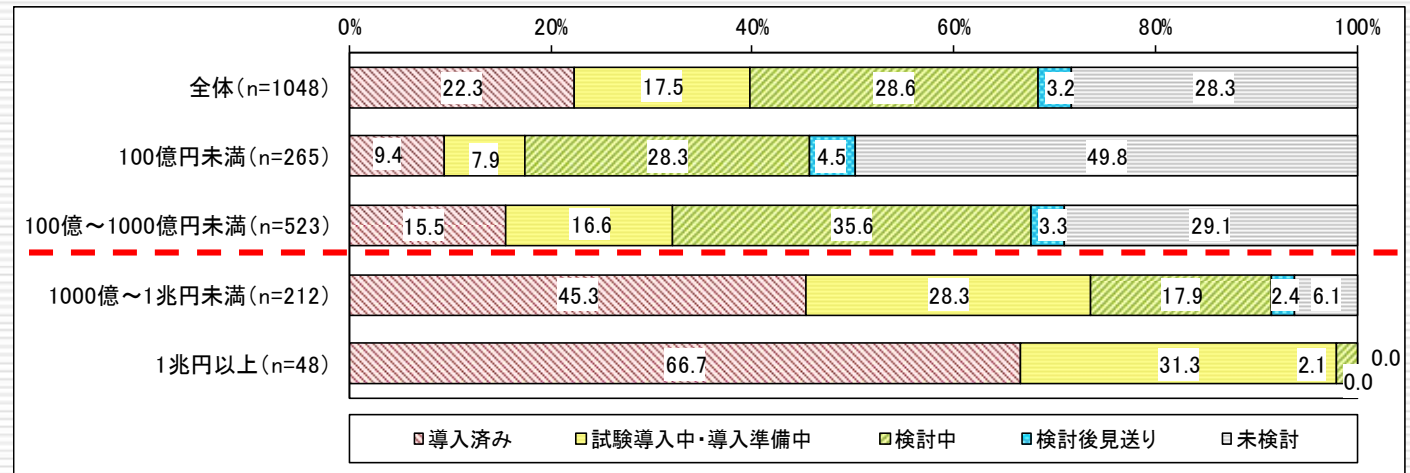


売上高別  
パブリッククラウド  
(SaaS)の  
導入状況

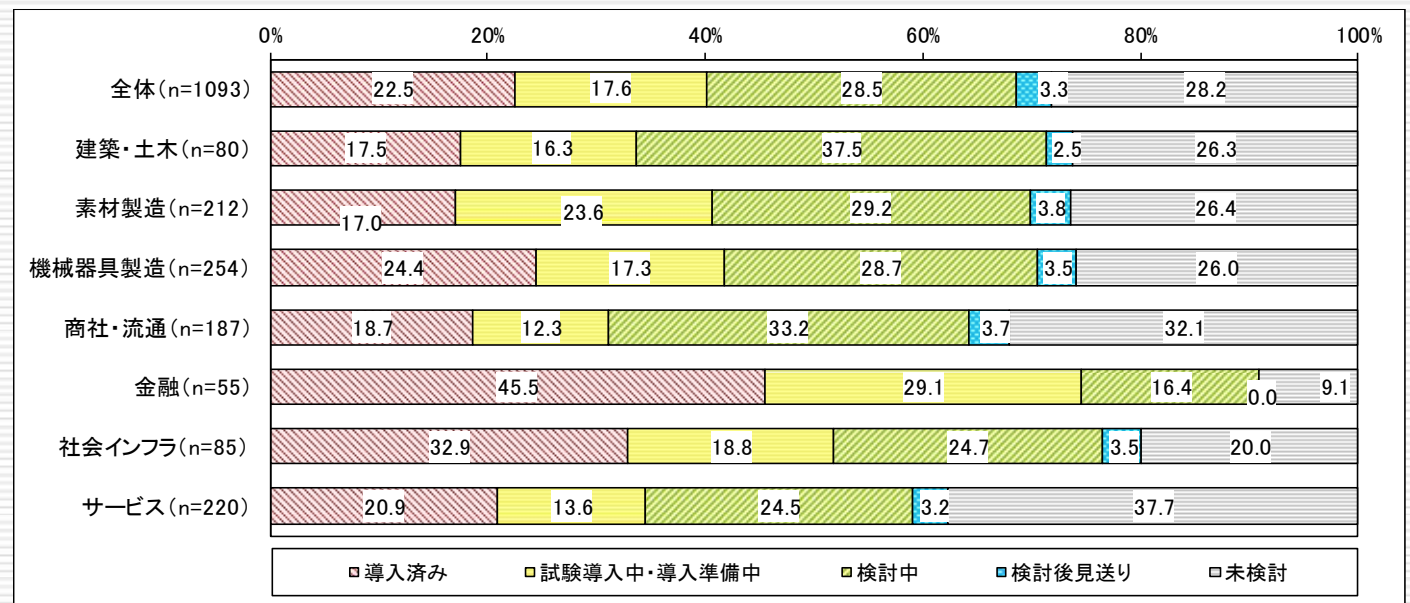


# <RPAの導入状況> 売上高1000億円を境に導入状況に差がある。1兆円以上の企業ではほぼ全企業が導入又は導入準備中。業種別では金融、社会インフラの導入率が高い

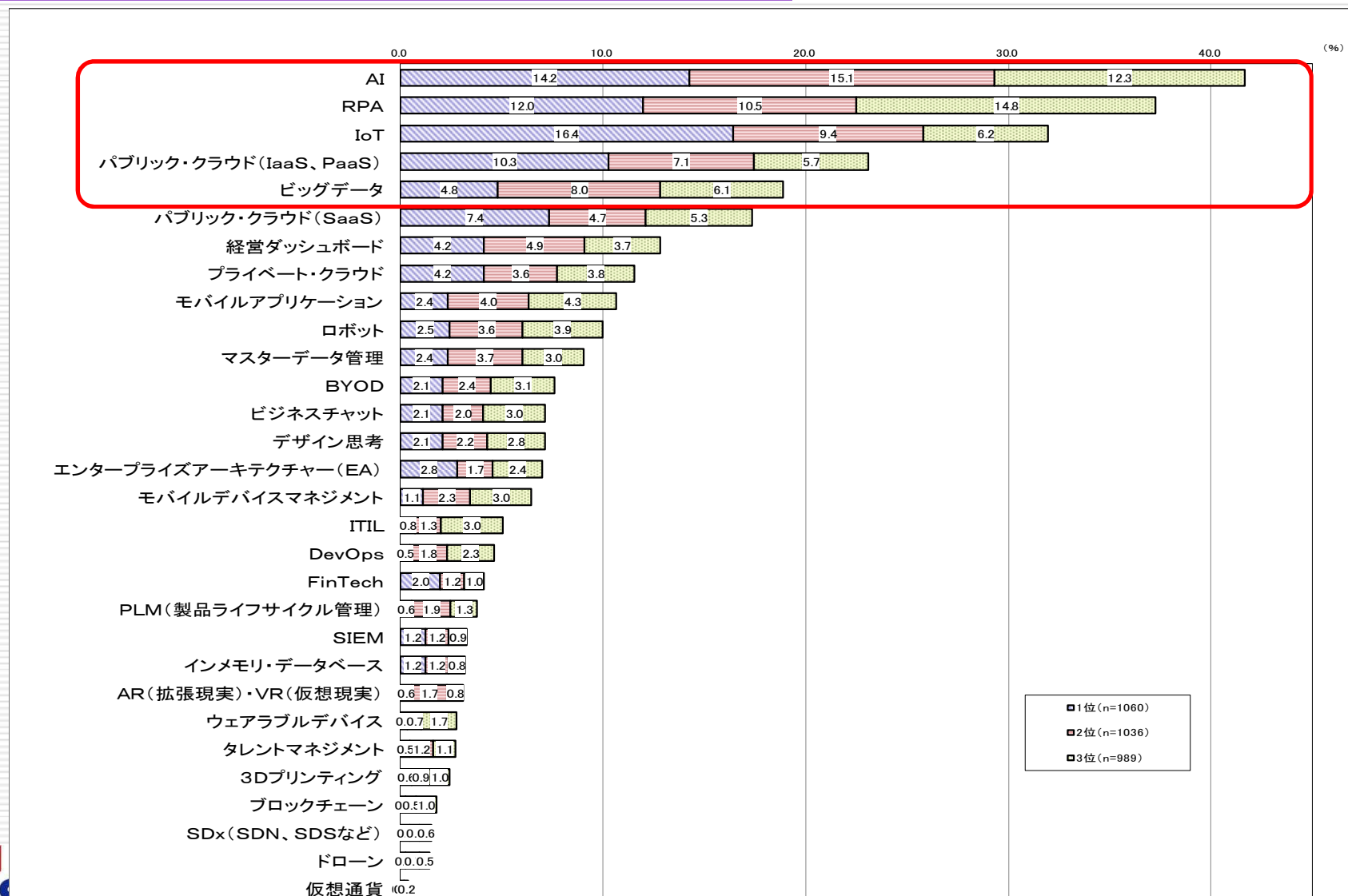
## 売上高別 RPAの導入状況



## 業種別 RPAの導入状況

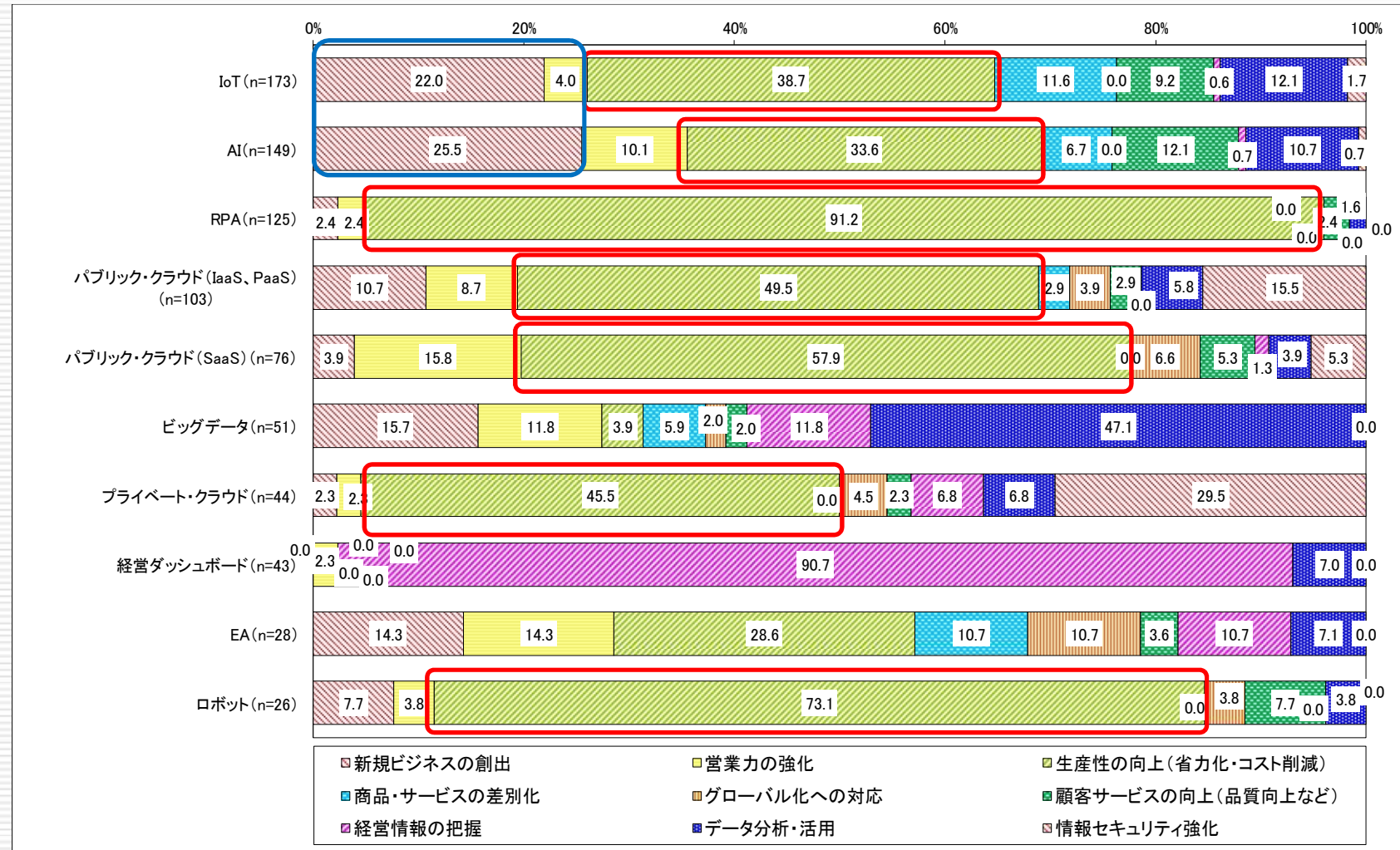


# <企業において最も重視すべきテクノロジー(1～3位の合計)> 重視すべきテクノロジーは昨年度と同じ傾向で「AI」「RPA」「IoT」「パブリッククラウド(IaaS、PaaS)」「ビッグデータ」。RPAは昨年度5位から2位に躍進



## <重視すべきテクノロジー理由(1位のみ)>

重視すべきテクノロジーが選ばれた理由は「生産性の向上(省力化・コスト削減)」の割合が高い。「IoT」「AI」では「新規ビジネス創出」としても注目。



# 【IT予算・投資マネジメント】

## 18年度調査のポイント

1. IT予算のDI値は、過去10年間で最高の数値となった。金額ベースでも対前年8.7%増加となり、堅調なIT投資が継続。
2. しかし、ランザビジネス予算対バリューアップ予算の比率は80対20とほとんど変化なし。ランザビジネス予算が90%以上を占める企業の比率が増加に転じ、約4割を占める。

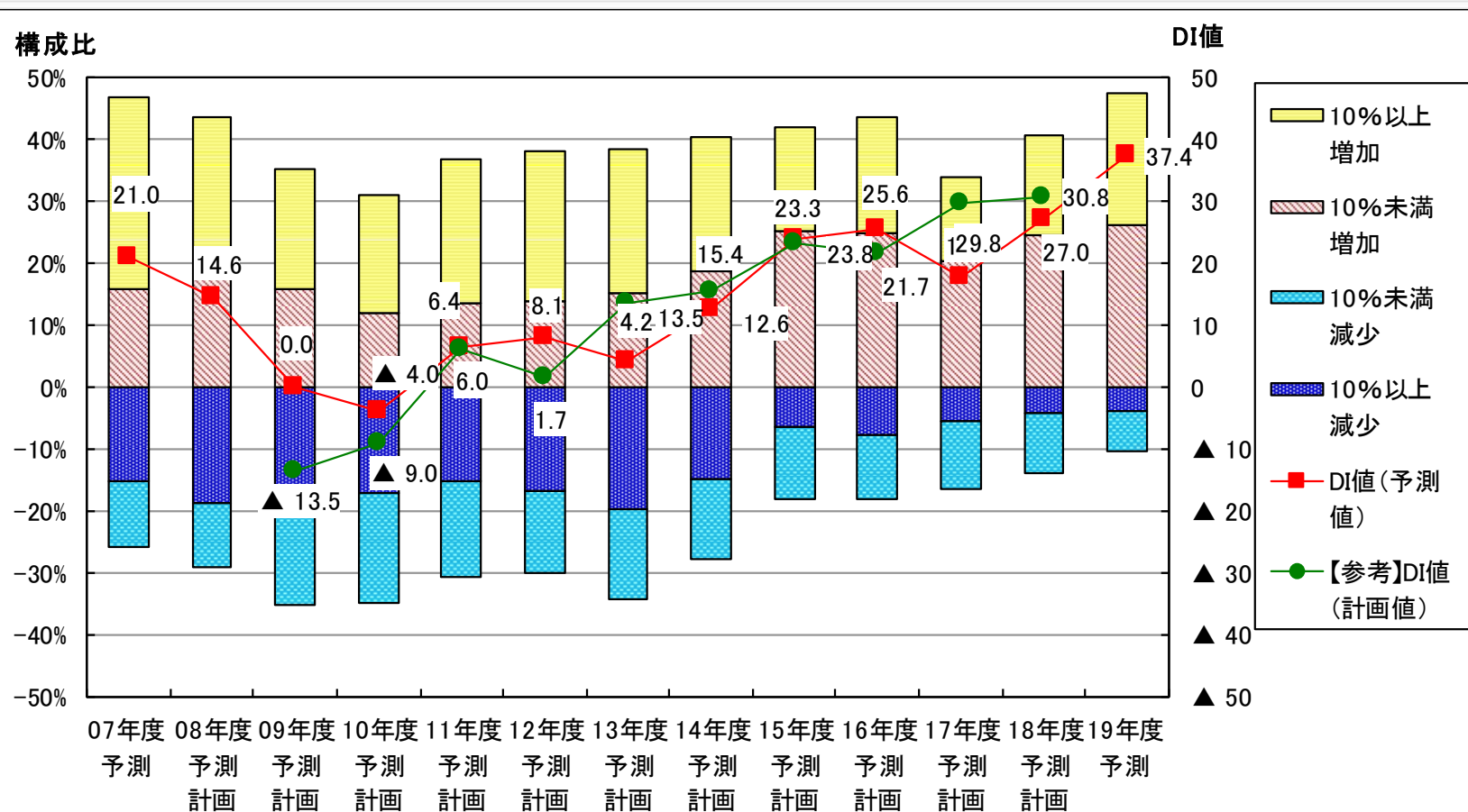
## 重点テーマ(デジタル変革力)との関係性・ポイント

1. IT予算増加の主要因は既存システム刷新。デジタル化の検討状況と相関は見られるものの、IT予算への影響は限定的。
2. 解決したい中期的な経営課題は、「業務プロセスの効率化」と「迅速な業績把握、情報把握」が主軸で変わらず。「商品・サービスの差別化・高付加価値化」がラックアップし、デジタル化への期待がうかがえる。

# <IT予算DI値の推移>

IT予算のDI値は過去10年で最高の数値

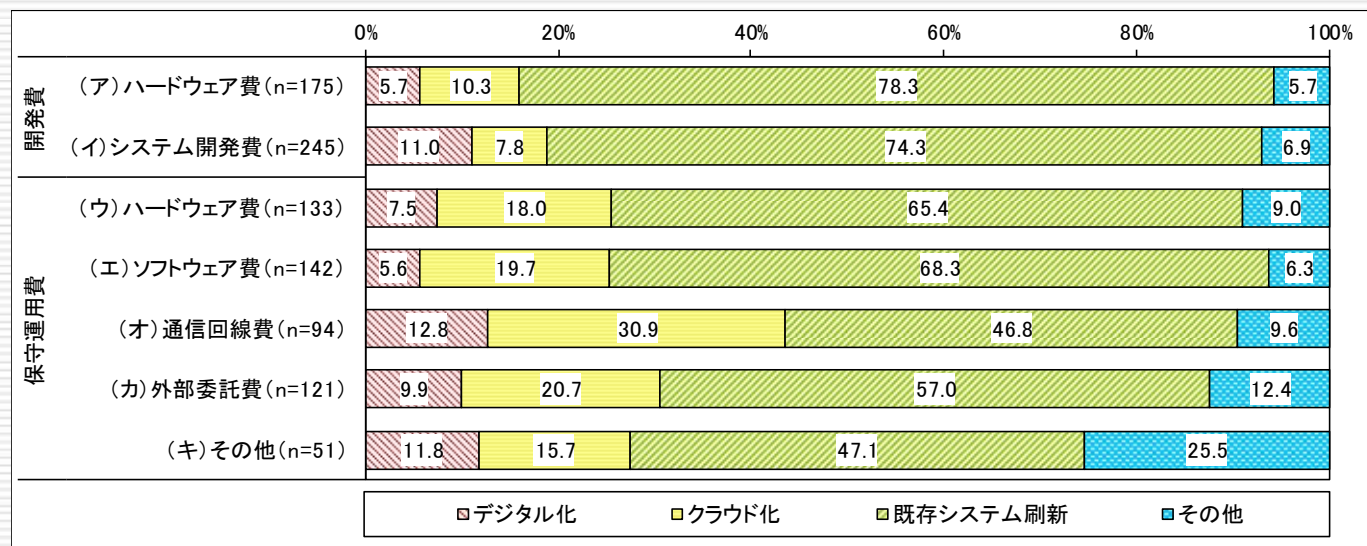
18年度計画:30.8ポイント、19年度予測:37.4ポイント



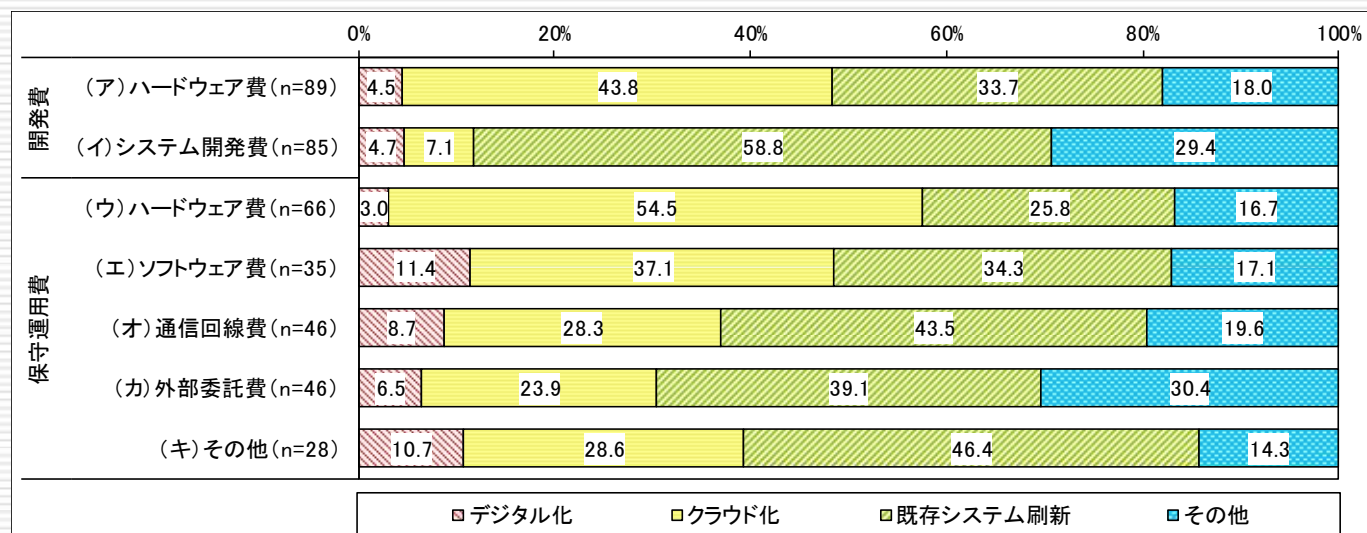
18年度計画では社会インフラ、建築・土木のDI値が高く、19年度予測では金融のDI値が倍増した

＜IT予算の10%以上増加、減少の理由＞ 10%以上増加の理由は既存システム刷新が通信回線費を除いて約7割前後。10%以上減少の理由はクラウド化によるハードウェア費が5割前後。

### IT予算の10%以上 増加の理由



### IT予算の10%以上 減少の理由

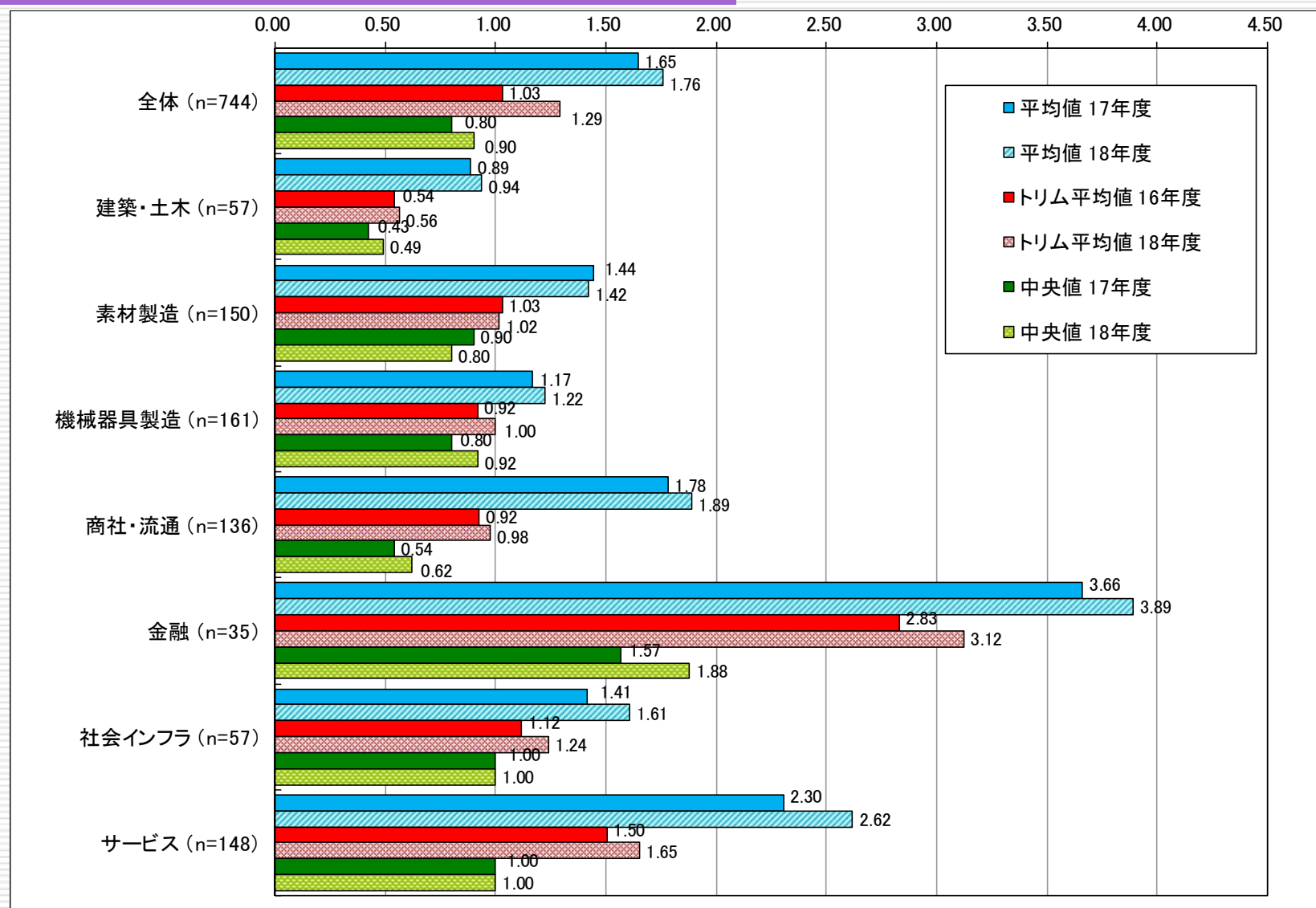


＜一企業あたりの開発費と保守運用費＞ 開発費と保守費の割合は45:55でこれまでとほぼ同じ。開発費が17年度比15.7%の増加、保守運用費が3.4%の増加であり、金額の増加要因は開発費の伸びによるものが大きい

| n=737  | IT予算（百万円） |       |       | 伸び率   |      |      | 構成比   |       |
|--------|-----------|-------|-------|-------|------|------|-------|-------|
|        | 開発費       | 保守運用  | 合計    | 開発費   | 保守運用 | 合計   | 開発費   | 保守運用  |
| 18年度計画 | 1,138     | 1,348 | 2,486 | 15.7% | 3.4% | 8.7% | 45.8% | 54.2% |
| 17年度計画 | 983       | 1,304 | 2,288 | -     | -    | -    | 43.0% | 57.0% |

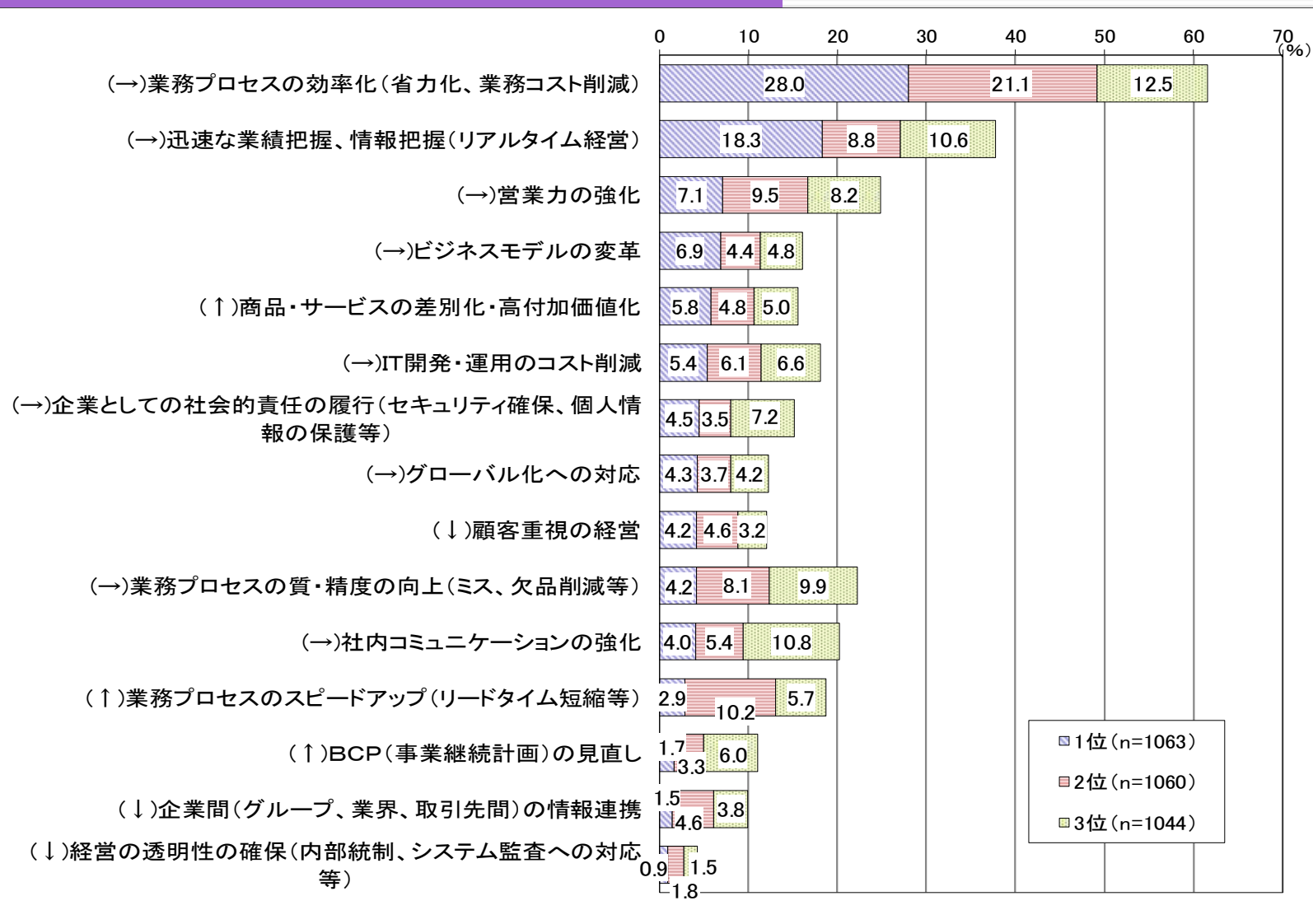
## <IT予算の売上高に占める比率>

売上高に対するIT予算比率が17年度より平均値で0.11ポイント、トリム値で0.26ポイント増加。素材製造を除き、全業種で平均値、トリム値ともに増加。



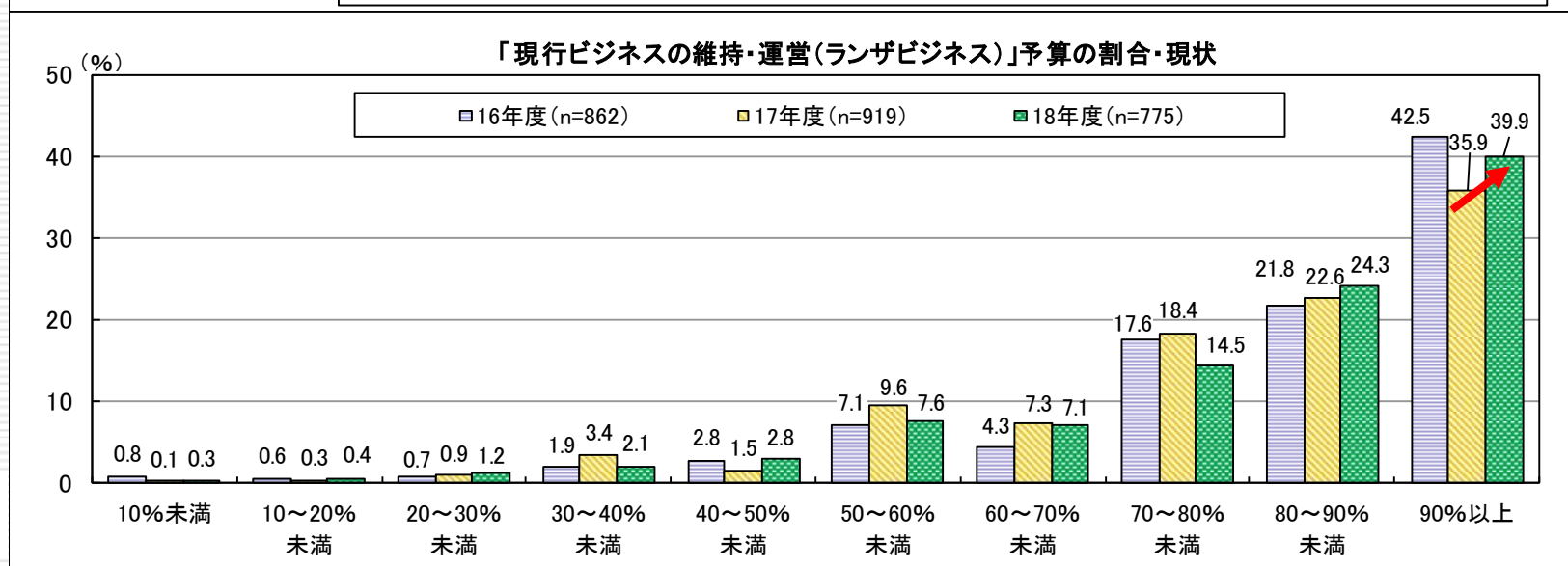
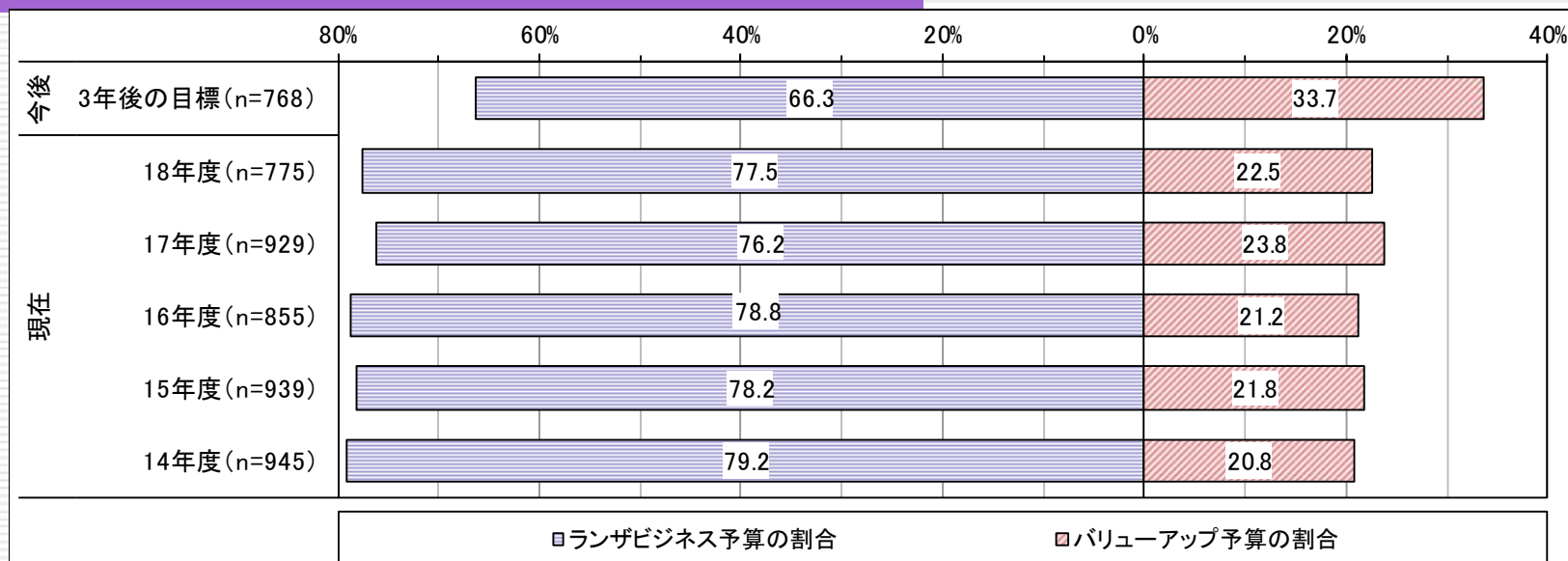
# ＜IT投資で解決したい中期的な経営課題＞

IT投資で解決したい中期的な経営課題は、「業務プロセスの効率化」と「迅速な業績把握、情報把握」が主軸。「商品・サービスの差別化・高付加価値化」が伸びた。



## <年度別 IT予算配分>

ランザビジネスとバリューアップの比率は80対20でほとんど変化なし  
ランザビジネス予算90%以上の比率が増加に転じ約4割に



# 主な調査結果

## 1. 回答企業のプロフィール

## 2. 重点テーマ:「デジタル化」の進展と成果

- ・ビジネスのデジタル化  
組織／システム／基盤

## 3. IT予算・投資マネジメントとの関係

- ・ITトレンド
- ・IT予算・投資マネジメント

## ➤ 4. 基幹システム・マスターデータとの関係

- ・企業を支える基幹系システム
- ・マスターデータ

## 5. システム開発・IT基盤との関係

- ・システム開発
- ・IT基盤

## 6. グローバルを含む情報セキュリティとの関係

- ・グローバル戦略
- ・情報セキュリティ

## 7. IT人材との関係

- ・IT人材

# 【企業を支える基幹系システム・マスターデータ】

## 18年度調査のポイント

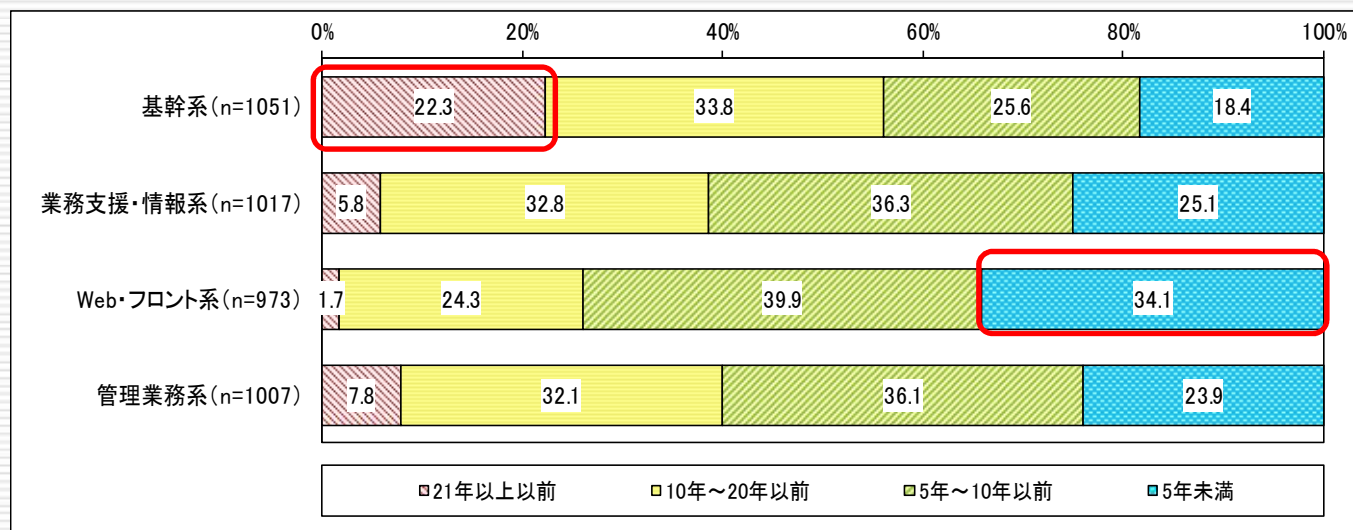
1. 基幹系システムは、利用期間が長いだけでなく(21年以上が22.3%)、メインフレーム比率も格段に高い(30.1%)
2. サイロ化、ブラックボックス化、マスターデータの連携不備等については規模が大きい企業ほど何らかの対処ができている(各質問に対して、困難な状況にある企業は15~30%程度存在するが、悲観的な状況とまでは言えない)
3. 高齢化・人材不足による現行システムの維持・継承が問題

## 重点テーマ(デジタル変革力)との関係性・ポイント

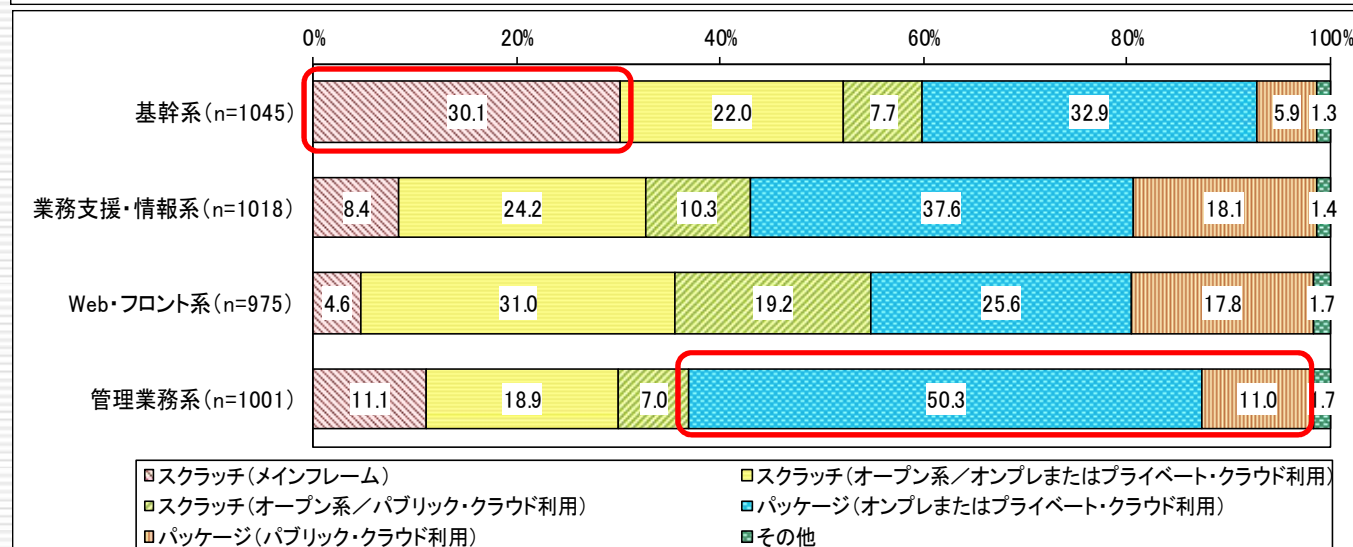
1. 基幹系システムの対応状況やマスターデータの管理状況は、デジタル化の導入状況と関係が深い
2. 商品・サービスのデジタル化を中心に、以前とは異なるシステムアーキテクチャの導入も求められているようだ

＜業務システムの構築時期、技術要素＞ 基幹系システムの構築時期は21年以上前が約2割、メインフレームが約3割。一方、Web・フロント系は構築時期5年未満が3割強、管理業務系はパッケージが約6割。

### 業務システムの構築時期

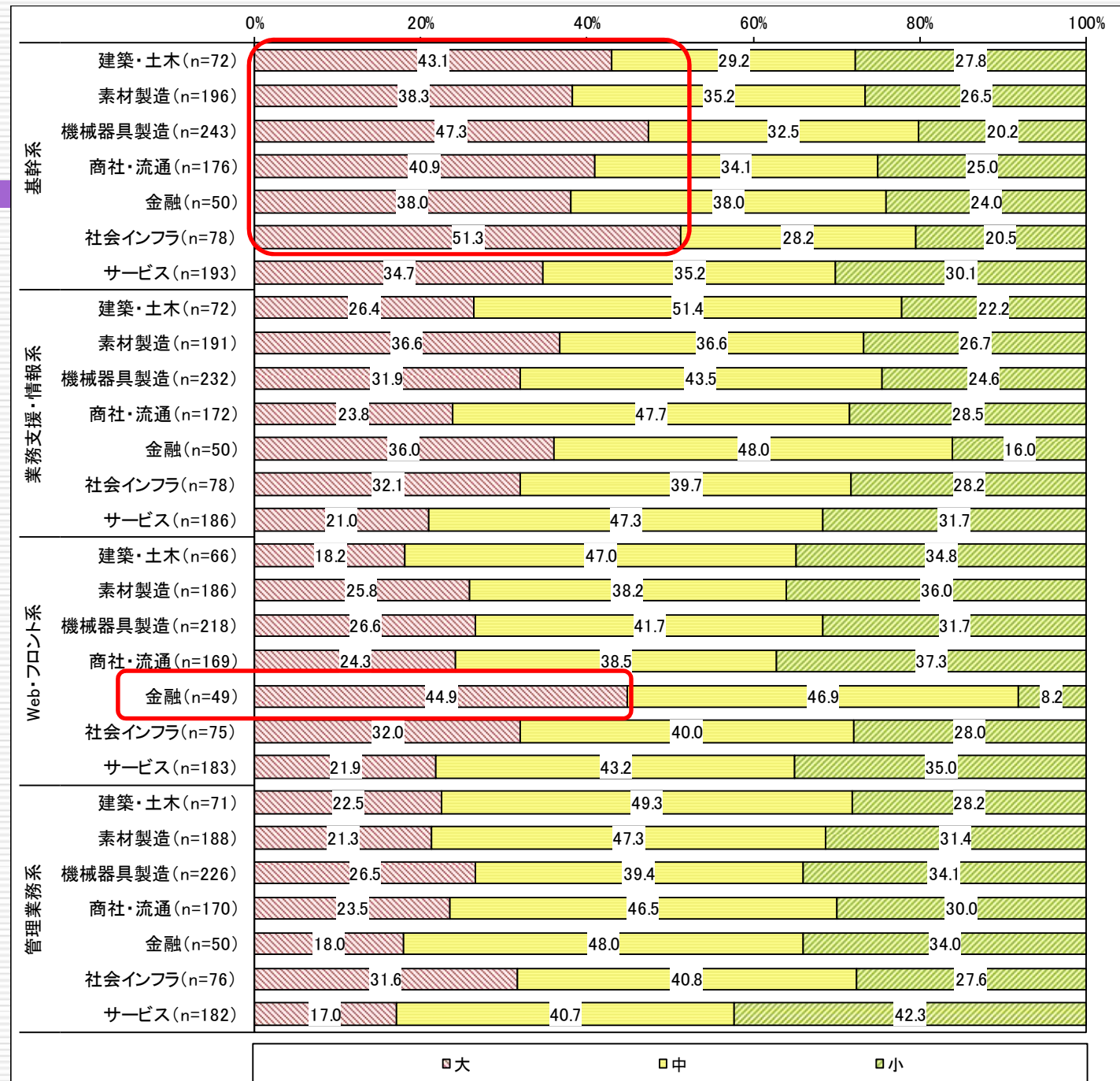


### 業務システムの技術要素



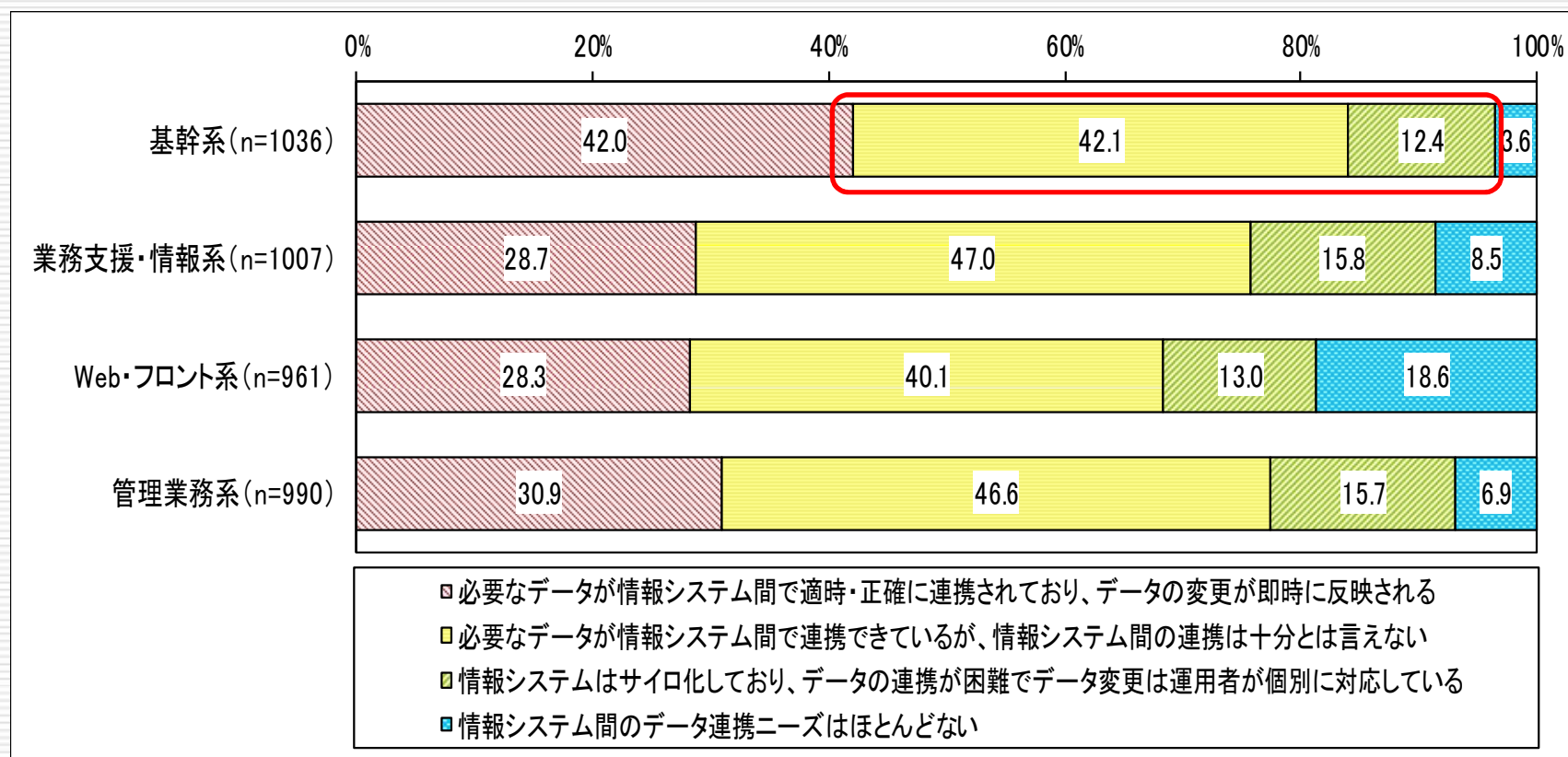
## ＜業種別業務システム別 デジタル化の影響＞

基幹系は他の業務システムと比較してデジタル化の影響が大きい。  
ビジネスのデジタル化が進んでいる金融は、Web・フロント系が他の業種グループと比較して飛びぬけて高い

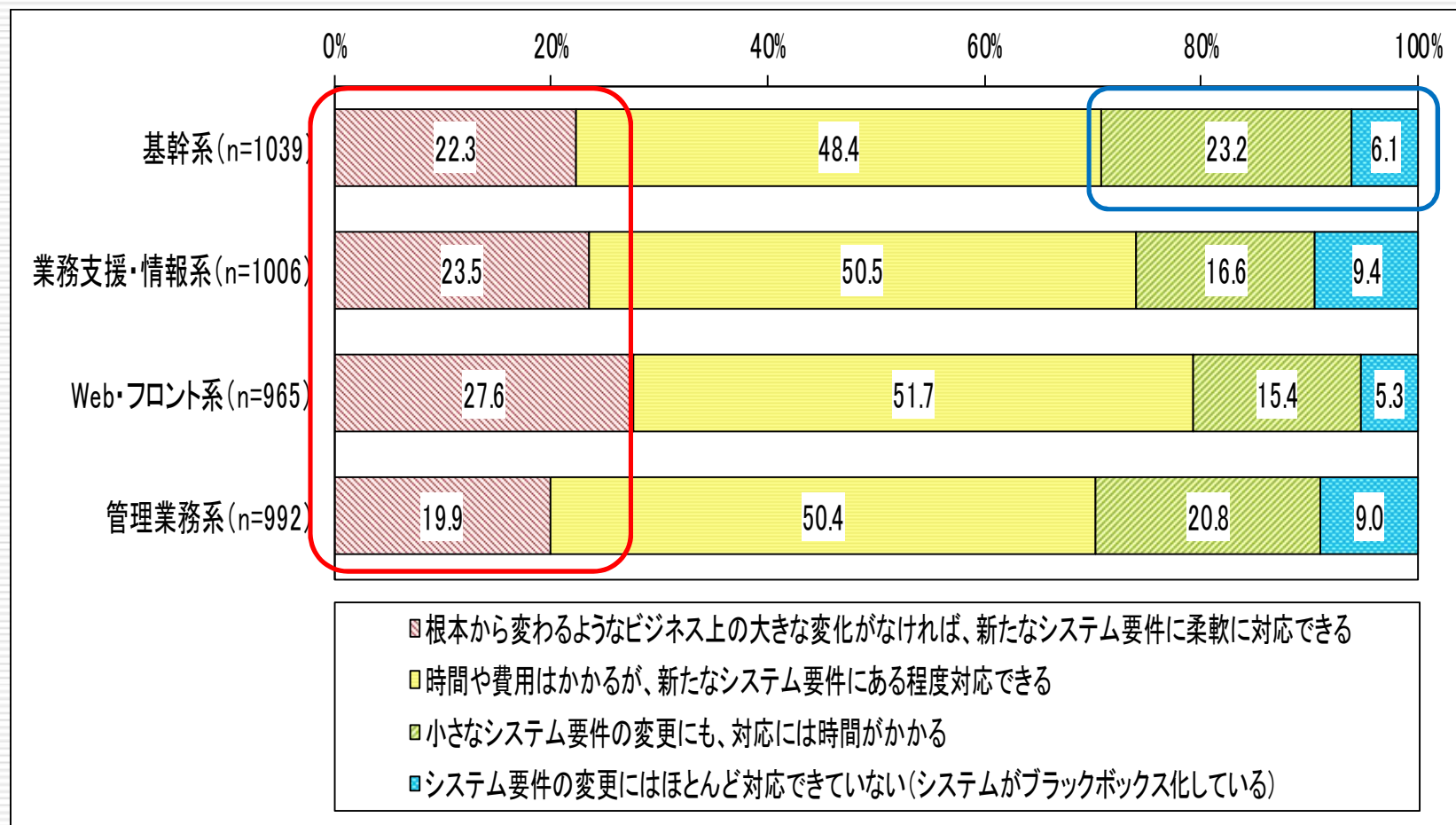


## <業務システム分野別 データ連携・サイロ化の状況>

基幹系システムでは多くの企業がシステム間のデータ連携を必要としている。一方で半数以上の企業がデータの連携に苦慮している。

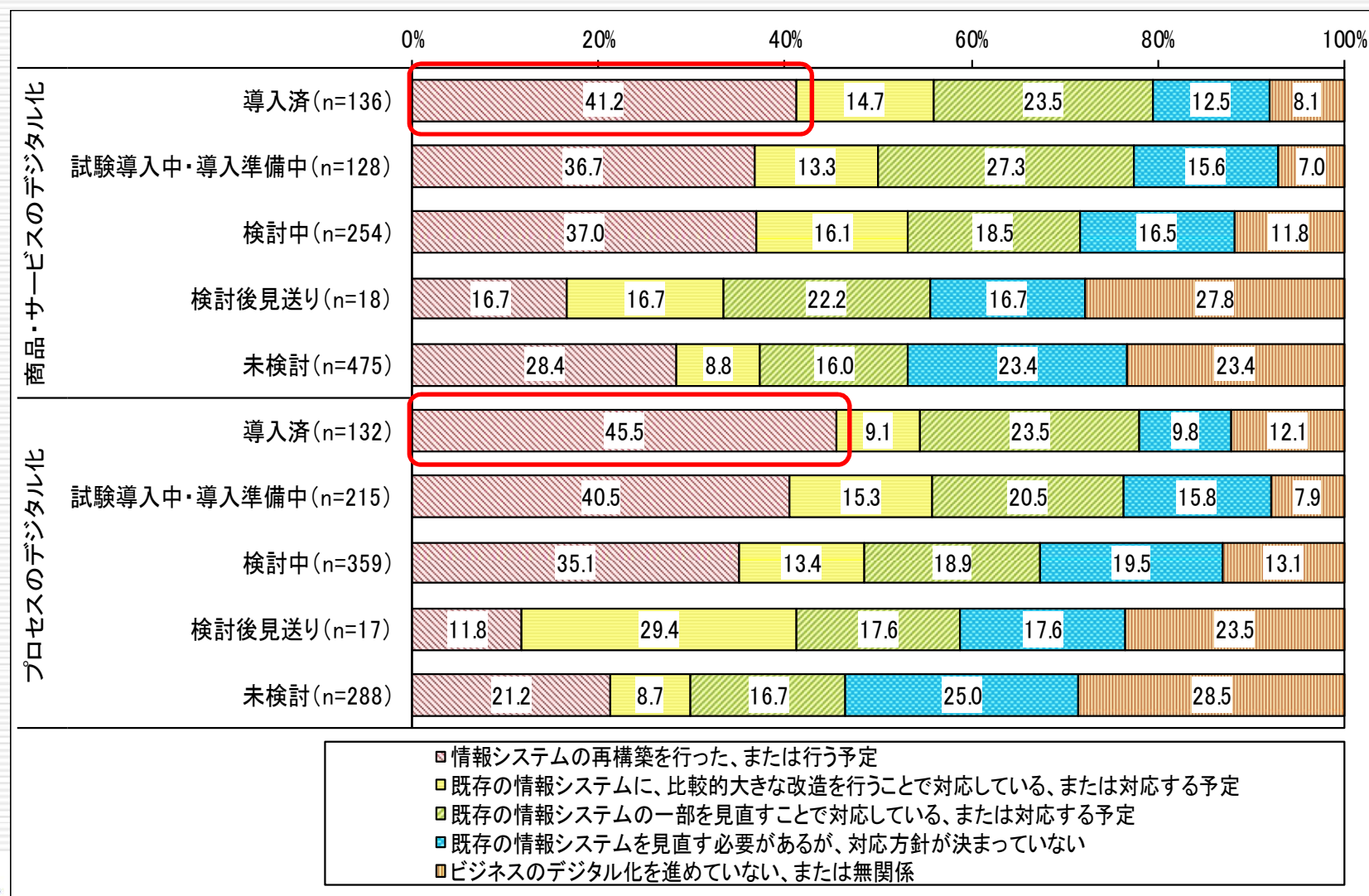


＜業務システム分野別 システムの柔軟性＞変更要求に柔軟に対応できる企業は、業務システム分野によらず約2割。基幹系システムでは小さな変更でも時間がかかる、ほとんど対応できていないが約3割ありシステムが硬直化している。

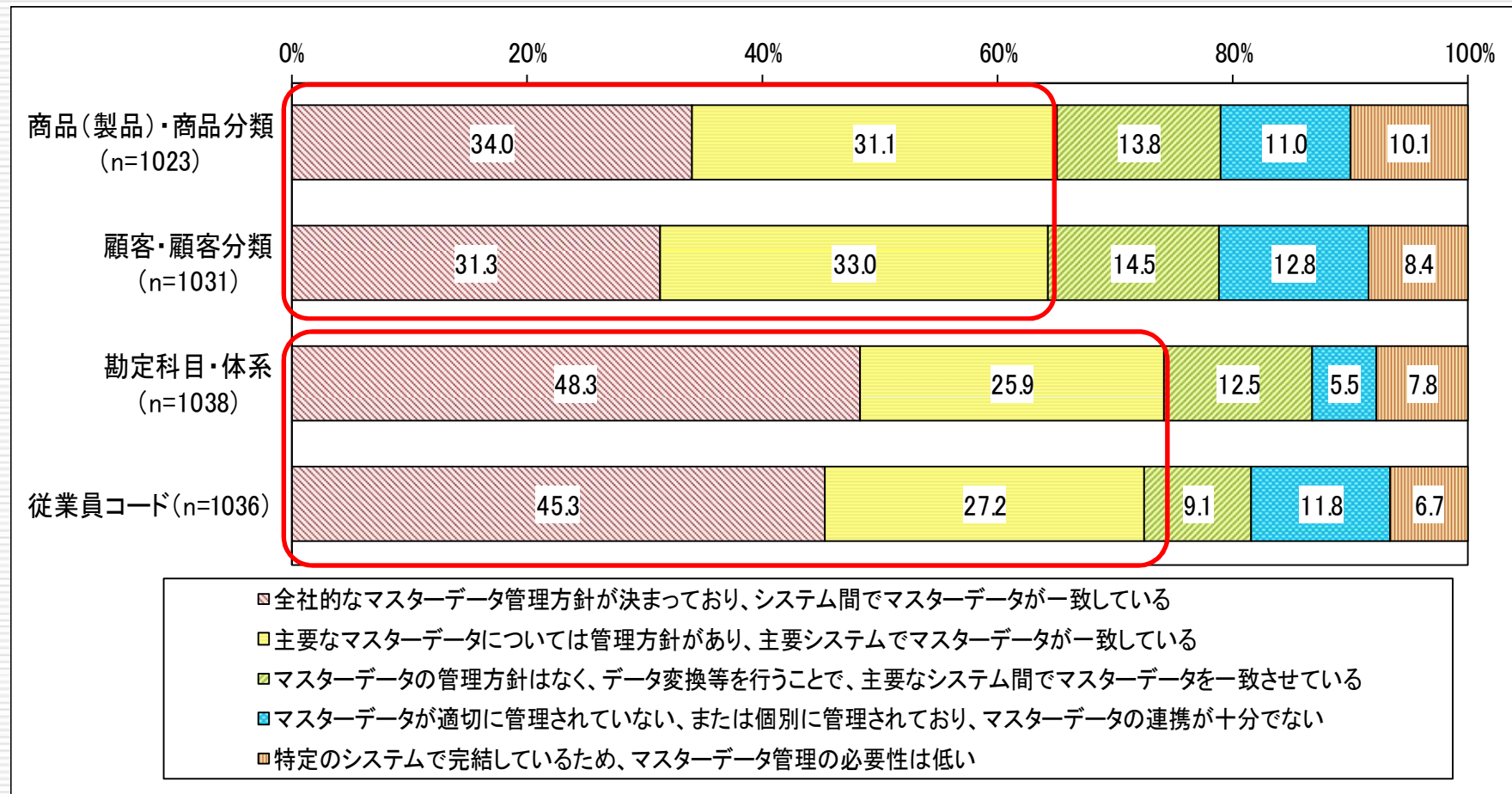


## ＜デジタル化の取組み状況別 基幹システムの対応状況＞

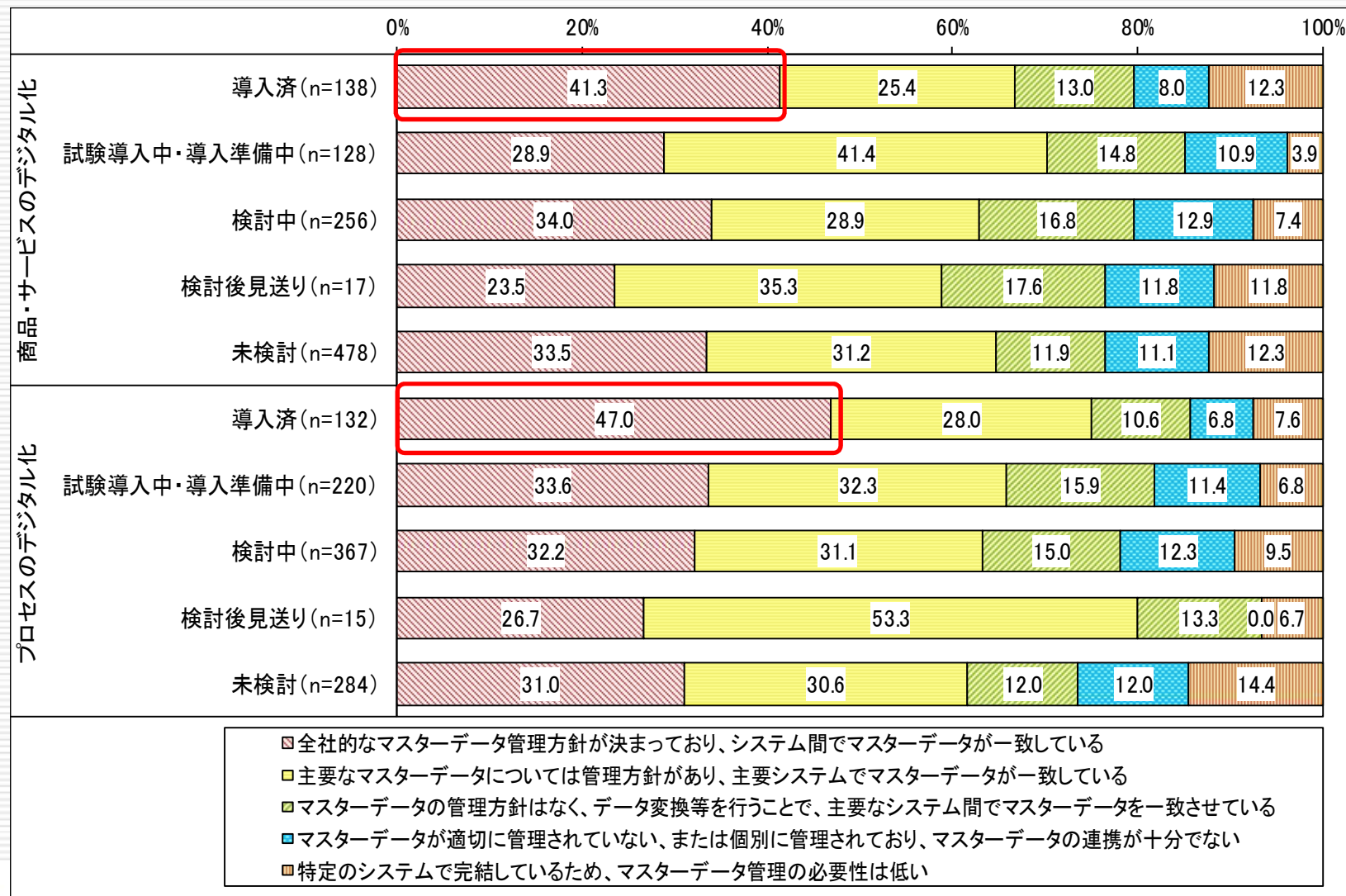
デジタル化の導入済企業で情報システムの再構築を行った企業は4割強。比較的大きな改造、一部見直しも含める約8割の企業で何らかの対策を実施している。



<主要マスターデータ管理状況> 商品、顧客は約2/3の企業で、程度の差はあるがマスターデータがほぼ一致している。勘定科目、従業員は7割以上の企業でマスターデータがほぼ一致している。



# <デジタル化の取組み状況別 商品分類マスターデータ管理状況> デジタル化導入済の企業は4割強が「全社的な管理方針があり、マスターデータが一致」と回答しており、デジタル化はマスターデータ管理方針と相関関係がありそう。



# <デジタル化の取組み状況別商品分類マスターデータデジタル化の影響> デジタル化導入済の企業では5割強が「マスターデータを連携する仕組みがありデジタル化の影響は小さい」と回答。

